

凶暴な余震

照井 翠

「姉ちゃん、避難するんでしょ」「いや、しないよ。この揺れの感じだと、津波は大丈夫」「…避難した方がいいんじゃないの」「心配してくれてありがとう。でも、もの凄く眠いんだ。もう寝るよ」。

震災後のある深夜、大きな地震が発生し、津波警報が出された際、心配した弟から電話がかかってきた。私は、避難しなかった。

震災後、「余震」という控えめな名前の割に凶暴さ丸出しのもの、凄い地震に幾度となく見舞われた。数分おきに、地も割れんばかりの余震に襲われた期間もある。心の糸が切れかけた。釜石は海に近いせいか、地震が来る前、地鳴りというのか、何とも気持ちの悪い「前兆」がある。直後、ドンと揺れる。前触れなどもつたいがらず、いきなり暴れたらいいだろう…。何度そう思ったか知れない。

私の家まで津波は来た。私は二階に部屋を借りていたが、一階の方の庭や玄関まで水が来た。もしあの地震が、私が商店街で買い物をする休日起こっていたら、どうなっていたものか。津波は「引き波」が怖いと浜の人は言う。「引き波」は一秒間に十メートルほどの速さで一気に引く。くるぶし程度の海水で、ロックがかかる。水に倒れ込んでしまったら、あとは滝を落下する速さで流される。

激流に吞まれながら、あなたは、最後に何を見たのだろう。



震災から二年九ヶ月。釜石港の仮の岸壁。(2013年12月11日) 写真 筆者

錆びたパチンコ玉

震災後、海を見ようと思ったのは、いつだったろう。美しい三陸沿岸を呑み込み、平穏な暮らしを破壊し、尊いいのちを奪った海が許せなかった。心底憎かった。海なんて、死ねばいいと思った。

何がきっかけだったか。今日は海に行こうと思った。家から釜石港までは、震災前は二十分弱の道のりだった。それが今では六分で行ける。どんな建造物も土台だけとなり、港の方向へ斜めに突っ切って行ける。ふと足裏に特有の感触があった。覗くと、やはりパチンコ玉だった。潮で相当錆びている。そこそこに転がっている。ここはパチンコ屋だったのだ。ギャンブラーの夢の跡。錆びた玉が、ここで起こったことを物語っていた。この周辺にどんな店があったのか思い出せない。確かラーメン屋があったはずだ。その近くに小料理屋があった。釜石に赴任し、歓迎会をしていたいたお店。

しかし、なんて不思議な町なのだろう。一切障害物が無い。どこまでも自在に行ける。更地だらけの町。ここで、一体何があったのだろう…。頭がおかしくなりそうだ。釜石港に着いてから、母に電話した。「今、港に来てるんだよ」「…大丈夫なの?」「何も起こらないよ。もう、終わったんだ」。波は飽くまでも穏やかだった。パチンコ玉を海へ放った。玉は、最後の軌跡を描き、海へ還った。



釜石市鶴住居の根浜海岸。美しい砂浜を喪った。(2015年2月8日)

写真 筆者